

中韓母語話者の日本語作文における比喩表現について
— 指標比喩・結合比喩・文脈比喩という観点から —新城 直樹⁽¹⁾・蔡 梅花⁽²⁾・金井 勇人⁽³⁾

要 旨

本稿では中韓母語話者が執筆した日本語作文における比喩表現の特徴を検討し、日本語教育ではどのような点に留意すべきかについて考察した。具体的には「中韓母語話者による逐語訳つき日本語作文コーパス」から抽出した作文データを資料に、指標比喩・結合比喩・文脈比喩という3分類に基づいて、比喩表現について分析した。一般に、比喩は母語に根差した性質を持つと考えられ、他の言語の母語話者にも問題なく理解されるとは限らない。このような理解不可能性を「言語間ハードル」と呼ぶとすると、指標比喩・文脈比喩には「言語間ハードル」を乗り越える性質が内在している一方、結合比喩はそうではない、ということを示した。その結合比喩のうち、特に「言語表現は同じだが、概念基盤が異なる」ケースに誤用が起きやすい。したがって他言語で比喩を書く場合には、特に結合比喩に留意すべきである、と本稿では結論した。

【キーワード】(指標/結合/文脈)比喩, 日本語作文, 日中韓対照, 言語間ハードル

1. はじめに

本稿では学習者による日本語作文における比喩表現を資料に、どのような特徴が見られるのかについて考察していく。それにあたって、本稿では比喩を次のように考える。

(1) 表現主体が、表現対象を、それを過不足なく直接にさし示す言語形式を使わないで、その代わりに、言語的な意味では他の事物・事象に対応する言語形式を提示し、その言語的環境との違和感や、それが現れることの文脈上の意外性などで、受容主体の想像力を刺激して、両者の共通点を推測させることによって、間接的に伝える表現技法である。(中村 1977:154-155)

日本語学習者にとって日本語は非母語であるが、そのような非母語話者による日本語作文においても、(1)の定義を満たすような比喩は出現する。このことは、比喩が表現行為において必須であることを示すものだろう。

比喩と隣接する幾つかの言語表現(字義的表現・字義的慣用句・比喩的慣用句・無意味表現)との異同について、坂本(1982)は次のように述べている。

(2) ある表現が慣用句として用いられるかどうかは、その表現の内部構図に依るのではなく、まず第一に、その表現に比喩的解釈がほどこされるか否かに依っている。字義的表現に比喩的解釈が与えられなければ、それはそのまま字義的表現となるし、比喩的表現に比喩的解釈が与えられなければ、それは無意味表現となる。

しかし、ある表現に比喩的解釈が与えられただけでは、それはいわゆる比喩であって、慣用句

⁽¹⁾ 琉球大学国際教育センター 専任講師

⁽²⁾ 秀林外語専門学校 日本語ビジネスコース 専任講師, 埼玉大学 日本語教育センター 非常勤講師

⁽³⁾ 埼玉大学 人文社会科学部 教授

ではない。その表現が言語社会の中で定着して、一般の文法体系の中に組み込まれていく過程を経てはじめて、その表現は慣用句として認められる。

(坂本 1982:16-17)

その上で、これらの関係性を図1のように示している。

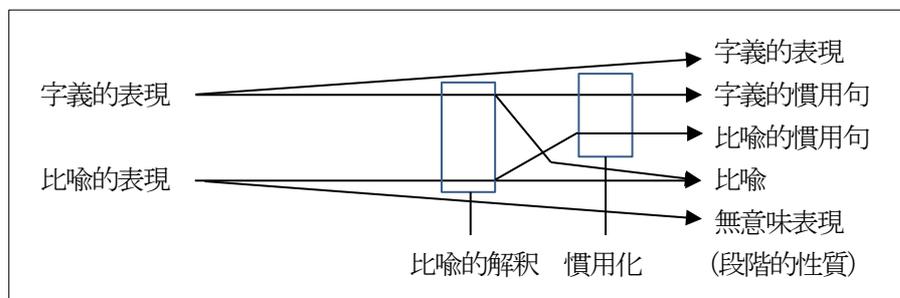


図1. 比喩と隣接する幾つかの言語表現との関係性 (坂本 1982:17)

これに従えば、比喩的表現に比喩的解釈が成され、それが慣用化しなかった場合に比喩となる。一方、それが慣用化した場合には比喩的慣用句となる。比喩を考察対象とする本稿では、「腕が上がる／腕を上げる」などの比喩的慣用句は、取り上げない。

以上のように考察対象を定義・限定した上で、指標比喩・結合比喩・文脈比喩という3分類に基づいて、本稿では比喩を考察していく。その際のポイントは「他言語の母語話者にとって、ある比喩はどのように理解(不)可能であるか」である。

本稿で使用する作文データは、本稿の筆者らが作成した「中韓母語話者による逐語訳つき日本語作文コーパス」から抽出したものである。同コーパスは日本語学習者120名(韓国語母語話者60名+中国語母語話者60名)が執筆した日本語作文(1,000字)、および同一執筆者による中国語訳文・韓国語訳文を収録している。またその中国語訳文・韓国語訳文には、本稿の筆者らが逐語訳を付した。作文のテーマは説明文「好きなことわざを説明する」、描写文「尊敬する恩師との思い出を描く」、物語文「4つのイラストから物語を創作する⁽⁴⁾」の3つで各40本、合計120本である。

2. 先行研究

2.1 指標比喩・結合比喩・文脈比喩について

中村(1977)は比喩表現について、指標比喩・結合比喩・文脈比喩という3つのカテゴリーを提示している。

(3) 指標比喩:

「～のようだ/ような/ように」や「～みたいだ/みたいな/みたいに」など、特定の言語形式(指標)を備えた比喩。

例えば「AはBのようだ」において、AとBは類似性に基づいて結び付けられる(ただし注7も参照)。このときの「～のような」を指標と呼ぶが、この指標には「～のようだ/ような/ように」といったものの他、「～ほどの」「～と変わらない」「～に匹敵する」など多くの言語形式がある。(現代語

⁽⁴⁾ 物語文における4つのイラストについては、本稿末の資料(1)にあるURLを参照。

に限れば) すべての直喩は指標比喩に含まれる, と言える⁽⁵⁾⁽⁶⁾。例) 彼はブルドーザーのようにパワフルだ。

(4) 結合比喩:

指標比喩におけるような指標がなく, 「何らかの言語単位, すなわち, 接辞・造語成分・語・句などの間のある結びつきに, 慣用からの顕著な逸脱や非論理性, 少なくとも言語上の論理的な飛躍が感じられる種類の比喩表現 (同 176)」。

例えば「AはBだ」において, AとBは類似性に基づいて結び付けられている⁽⁷⁾。この結合比喩は指標がない比喩であり, (類似性に基づく) 隠喩と同義と言える⁽⁸⁾。例) 彼はブルドーザーだ。

(5) 文脈比喩:

指標比喩や結合比喩とは異なり, 「比喩の目じるしとなる指標も, 要素間の結合上の異常性も特に認められないが, その表現形式が表す言語的な意味と, それがその場で表していると思われる個別的な意味との対応に慣用からの著しいずれが意識される種類の比喩表現 (同 179-180)」。

文脈比喩の例としては, 「かじとりの僕が下手だからといって, 中でおまえがあばれだしたら, 小舟はひっくりかえって全滅するだけなんだ。」(島尾敏雄: 死の棘) という一節が挙げられる。ここでは「家族の問題」を述べているのだが, それとは具体的な意味としては著しくずれる「小舟の話」を展開して, 比喩的に表現している。

2.2 言語表現と概念基盤について

東 (2014:112) では, 日本語母語話者による英語の比喩表現の理解について考察する中で, 両言語の比喩の対応を以下の3つに分類している。

- (6) a. 表現と概念基盤が同じ (あるいは類似)
b. 言語表現は同じである (あるいは類似する) が概念基盤は異なる
言語表現は異なるが概念基盤は同じ (あるいは類似する)
c. 言語表現と概念基盤とも異なる

⁽⁵⁾ 直喩とは「英語の simile に相当する喩法で, 喩義, つまりたとえる事物と, 本義, つまりたとえられる事物とを, はっきりと区別して掲げる場あいである (中村 1977:32)」。また「修辞学書によっては「月に叢雲, 花に風, 盛運久しからず」(略)といった例も, この直喩の中で説明される。その表現の中には「まるで」とか「ような」とかといった特定の言語形式はないが, それぞれ喩えるものと喩えられるものとを並列させてあることで, それが比喩表現であることが一見してわかる。そのため, 広義の《直喩》にはこのへんまで含めることが多い (中村 1991:263)。

⁽⁶⁾ 指標比喩には「ウォーターゲート級のスキャンダル」の「〜級の」や「へたな〜 (下手な寿司屋よりよっぽどうまい)」「ある種の〜」「小〜」「〜に感じられる」等も含まれる (中村 1991 参照) が, これらは類似性に基づくわけではないので直喩とは言えない。したがって, 指標比喩と直喩とは同義ではなく, 前者が後者を含むという関係にある。

⁽⁷⁾ 佐藤 (1978) は「隠喩 (結合比喩; 引用者注) は, まぎれもなく, 類似性《にことづき》, 類似性《に依存し》ている。(中略) ところが, 直喩 (指標比喩; 引用者注) は, XとYとの類似性《を提案し》, 類似性《を設定する》ものであった。極端な場合には, XとYはまるで似ていなくてもいい。「……のような」という指標が, 新発見の類似性を説明してくれるからだ。」と述べている。なお本稿では便宜上, 指標比喩も類似性に基づくと表現している。

⁽⁸⁾ その他, 類似性には基づかないが指標のない比喩として, 換喩 (隣接関係に基づく; 新城 (2001), 新城・金井 (2009) を参照), 提喩 (カテゴリーの大小に基づく; 多門 (2018) を参照) 等がある。ただし, これらは本稿では取り扱わない。

そして、(7) の例文を挙げて、(8) のように評している。

(7) I cannot sleep with my feet turning toward him.

彼のほうに足を向けて寝られないほど恩がある。(同 115)

(8) これらの表現は一見して分かるように日本語の日常の表現を直訳したもので、ナマ表現と命名したい表現である。(中略) 例えば、普遍的に身体スキーマの点から似ているようであるが果たしてどこまで分かちあえるか... (後略) (同 115-116)

ある言語における比喩を非母語話者が理解する際には、自身の母語の知識をもとに「学習言語の言語力」「イメージ・連想、その他の認知能力」「類推力、アナロジー、論理的思考」(同 184) が関わり合っているという。その上で、さらに次のように続ける。

(9) 論理的思考、推論 (logical thinking, analogical reasoning) を作用させ、普遍的知識によってある程度のところまで解釈は成功するが、その先、それだけでは行き届かない (例えば、慣用的意味であるとか、文化背景によって醸し出される意味合いとか) 微妙なニュアンスがそれぞれの言語に存在する。それが当該言語特有の宝とも言えるものである反面、他言語話者にとってハードルとなり、そのハードルを越えるのは中々難しい。(同 191)

このような「ハードル」を、本稿では暫定的に「言語間ハードル」と呼ぶことにする。本稿における作文データは、非母語話者が執筆した日本語作文である。したがって、そこに現れる比喩が、どのように「言語間ハードル」を乗り越えているのか (否か) という点は、興味深いところである。

結論を先取りして言えば、指標比喩および文脈比喩には「言語間ハードル」を乗り越えられる性質が内在している一方、結合比喩にはそのような性質は内在していない、ということになる。以下の各章で、詳しく検討していきたい。

3. 指標比喩

指標比喩は、指標によって比喩であることが明示されており、「比喩として解釈する」ことが読み手に要請されるものである (注7も参照)。

3.1 韓国語母語話者による指標比喩

次の指標比喩では「ように (様に)」という指標が用いられているが、日本語として厳密に解釈すると、不自然と言わざるを得ない。

(10) ある日Cさんがトラックを運転しコーヒー用品と農作物の種を仕入れ、帰ってきているとき事故が発生した。その事故とは、ある子狼が車に跳ねられた様に血を流していたのだ。

(k44)⁹⁾

「車に跳ねられた様に」というと、実際は「車に跳ねられた」わけではなく、「まるで車に跳ねられたかのように」という解釈が妥当である。つまり日本語で「車に跳ねられた様に」という場合、それは

⁹⁾ 「k44」は「中韓母語話者による逐語訳つき日本語作文コーパス」におけるIDを示す。以下の例文についても同様。

「車に跳ねられた」こと自体を除外している。

それでは、同一執筆者による韓国語訳である (10)' は、どうなっているだろうか。

(10)' 車に はねられた ように 血を 流して いた のである。
차에 치인 듯 피를 흘리고 있었던 것이다.

韓国語訳でも「듯」という指標が用いられている。ただしこれは、便宜上「ように」と訳されているものの、実際は「と思われる(事故で)」といった解釈が、正確な文意と言える。すなわち韓国語の「듯」は、日本語の「ように」とは違って「車に跳ねられた」こと自体を除外しないのである。

類似していると思われる日韓の指標比喩であるが、このように指標の意味に差異が存在するということもあり得、留意したい点と言える。

3.2 中国語母語話者による指標比喩

(11) の「空気が凝る(こる)」という表現は、同一執筆者による中国語訳では「凝固」となっていて、これは「空気が凝固するほど」という意図で用いたものと推測される。

(11) 試験のベルが鳴りました! 試験場で空気が凝るほど静かになりました。(c25)

(11)' 試験場 静か (連用) みたい 空気 凝固する た よう
考场 静 得 像 空气 凝固 了 一般。

日本語母語話者にとっては、(11) は「空気が凍るほど」といった比喩が妥当と思われ、「空気が凝る／固まる／凝固するほど」といった比喩は、日本語母語話者にとっては、やや「言語間ハードル」が高く、なかなか馴染めない。

ただし、「ほど」という指標が比喩としての解釈を要請するため、(11) も比喩として無事に解釈され得る。その際には上述の「馴染めない」が逆に機能して、むしろ新鮮味の強い、効果的な比喩となり得るだろう。

4. 結合比喩

結合比喩は、指標を持たないことから、比喩表現としての解釈を読み手に要請しないが、前述の(6a)タイプの場合は、非母語話者にも問題なく比喩として解釈され得る。

(6) a. 表現と概念基盤が同じ (あるいは類似) (再掲)

以下において扱う (12) が、この (6a) タイプと言える。一方、(6c) タイプの場合は、非母語話者には比喩として解釈され得ないだろう。

(6) c. 言語表現と概念基盤とも異なる (再掲)

この場合、読み手である非母語話者が(書き手である母語話者と同程度に)比喩意識を抱くことは不可能であり、したがって比喩として解釈することは難しい。図1に従えばこのような比喩的表現は、

比喩的解釈も慣用化も行われな「無意味表現」に相当すると考えられる⁽¹⁰⁾。

とは言え、日本在住で、かつN1合格レベルの高い日本語能力を有する学習者には、日本語母語話者に理解されないであろう(6c)タイプの比喩を回避する、という能力が備わっていると思われる(ここでは別の表現を選択する)。少なくとも本稿が依拠する作文データからは、そのような例は抽出できなかった。

それでは、学習者の日本語作文を分析する本稿において問題となり得るのは、何か。それは、下記の(6b-1)タイプであると考えられる。

(6b) b-1: 言語表現は同じである(あるいは類似する)が概念基盤は異なる

b-2: 言語表現は異なるが概念基盤は同じ(あるいは類似する)

(再掲; 引用者によってb-1/b-2に細分化)

以下において扱う(11)が(6b-1)タイプである。また、(6b-2)タイプは文脈比喩に相当し、こちらは理解に支障はないと考えられる(第5章で検討する)。

4.1 韓国語母語話者による結合比喩

次の(12)は、日本語母語話者の読み手にとっても、比喩として問題なく解釈することができるだろう。

(12) 最後の「ことわざ」は【三歳の癖80歳まで続く】ということわざだ。日本のことわざには【三つ子の魂、百まで】ということわざがあるように、韓国にはこのようなことわざがある。(中略)三歳に覚えた悪いクセは死ぬときまで治らないということだ。さらに言うと、“人間を‘修理’して使うことはできない”という、家庭教育の重要性を知ることができることわざだと言える。

(k09)

(12)の「人間を修理して使う」を比喩として解釈するならば、それは人間を「機械」に喩えている、ということになる⁽¹¹⁾。

(12)' 人間を '修理' して 使用する ことは 不可能である
인간을 '수리' 해서 사용하는 것은 불가능하다

韓国語訳においても同箇所は「수리(修理)」となっている。そして、韓国語においても「人間を修理して(인간을 수리 해서)」という表現は、人間を「機械」に喩えているとして解釈される。したがって、この比喩について言えば、(6a)タイプ「表現と概念基盤が同じ(あるいは類似)」であると分かる。

⁽¹⁰⁾ 例えば、言語Aにおいて「人生は机だ」という結合比喩が成立するとしても、それを言語Bの母語話者が問題なく解釈できるかは、非常に疑わしい。もしそうであれば、その理由は「言語表現・概念基盤ともに言語ABの母語話者に共有され得ないから」ということである。

⁽¹¹⁾ ただし、この喩えは唐突である(と執筆者が判断している)ためか、わざわざ“ ”や‘ ’といった記号で括っていることにも注意したい。

一方、次の (13) (13)' では、日韓語の比喩意識が異なる。

- (13) 確かに、外国での生活は母国での生活より容易ではありません。異なる文化や言葉に慣れるために耐えなければならないものも多いです。しかし、この時間が過ぎていくと、ご褒美の時間も近づいてくることを信じています。(k14)

日本語で「ご褒美の時間」というと、「時間」を「プレゼント」に見立てていて、ここには比喩意識が存在し、結合比喩として成立する。ところが韓国語訳では、同箇所に別の語が充てられている。

- (13)' 補償の 時間 また 近づいてくることを 信じて 疑い ません。
보상의 시간 또한 다가올 것을 믿어 의심치 않습니다.

当該箇所は「ご褒美」ではなく、「보상 (補償)」という語になっている。日本語で「補償」というと、それは主に金銭的なものを想起させるため、「補償の時間」という結合は(理屈は分かるけれども)奇妙に感じられる。

一方、韓国語においては、「보상 (補償)」は金銭的なもののほかに、時間的なものも自然に想起させる。したがって「補償の時間」という結合は有標的ではなく、その比喩意識は弱い(≒字義的表現)。むしろ韓国語では「ご褒美の時間」という結合の方が奇妙に感じられるため、執筆者は「ご褒美」を「補償」に変更したものと推察される。

もし、(13) の日本語作文が「補償の時間」であれば、それは (6b-1) タイプ「言語表現は同じである(あるいは類似する)が概念基盤は異なる」であるだろう。

- (13)" 確かに、外国での生活は母国での生活より容易ではありません。異なる文化や言葉に慣れるために耐えなければならないものも多いです。しかし、この時間が過ぎていくと、補償の時間も近づいてくることを信じています。

(13)" のように変更すると、「補償の時間」という結合は「日本語と韓国語で言語表現が同じ」となるが、先に見たように、両者の概念基盤は(金銭に限られるか、時間まで拡張するかにおいて)異なる。したがって「補償の時間」という結合が(理屈は分かるけれども)奇妙に感じられるのは、この (6b-1) タイプであるから、と考えられる。

4.2 中国語母語話者による結合比喩

日本語の「顔」は「革靴は男の顔である」のように用いられ、「とても重要な要素である」ことを比喩的に表す。しかし (14) は、やや不自然に感じられる。

- (14) 必ず正しく、流暢で、さらに上品の発音が要求されています。発音は言語を習得する人にとって、とても大事であり、顔でもあります。(c26)

それは「顔」の比喩が「他人の目に良く映りたい」という意識を基盤にしているため、個人的な営みである「言語習得」にとっては、奇妙な結合であるからだろう⁽¹²⁾。

⁽¹²⁾ これが例えば「外国語でのスピーチにおいて、発音は顔である」のような、他人の目を意識した文脈であれば、比喩と

一方、同一執筆者による中国語訳の(14)'には、対応する比喩表現がない。

(14)' 私たちから最初既にされる厳格に要求する 正確、流暢 (連体) 発音。杜 先生
我们从最初就被严格要求 正确, 流畅的 发音。杜 老师

考える これ 対する に 学習する 言語 (連体) 私たち から言う ~である 非常に 重要 (判断)
认为 这 对于 学习 语言的 我们 来说 是 非常重要的。

中国語においても「革靴は男の顔である」といった比喩表現は可能であるが、そこには日本語と同様の制約(他人の目を意識する)が存在する。そのためか、(14)'には「顔」の比喩が登場しない。それは執筆者が、「言語習得」にとって「顔」の比喩は不自然であると判断したから、と考えられる。

にもかかわらず、日本語作文の(14)では「顔」の比喩を使用している。執筆者は、上述の制約は中国語には存在するが、他言語(日本語)には存在しない、と考えた可能性がある(あるいは、そこまで注意が行き届かなかった)。このとき「~は顔である」という比喩は「言語表現は同一であるが、「顔」の概念基盤は異なる」ために、(14)の結合は奇妙となる。すなわち、そのような誤解によって(14)が産出されたのであれば、それは(6b-1)タイプであると言える。

5. 文脈比喩

文脈比喩は、語・句のレベルではなく、文・文章のレベルにおける比喩である。これは「見方によっては、文を超える大きな単位での結合比喩と考えることもできよう(中村1977:180)」とされる。また前章で見たように、文脈比喩は(6b-2)に相当するだろう。

5.1 韓国語母語話者による文脈比喩

(15)の執筆者は「ピアノを処分し、音楽大学の入試を辞めた(k35)」エピソードを、「服」にまつわる描写で喩えている。

(15) 自分に合わない服を見極めることも1つの能力ではないか。私は子供の時から音楽が好きだった。(中略)もちろん、今でも音楽のことは好きであり、スティーヴィー・ワンダーのように素晴らしいアーティストになりたいという夢はまだ残っている。だが、私は自分に合わない「作曲」という服を脱ぎ捨てた。 (k35)

(15)' 自身に 合わ ない 服を 区別する のも 一つの 能力では ないか。
자신에게 맞지 않는 옷을 구별하는 것도 하나의 능력이지 않을까.

(中略)

しかし, 私は 自身に 合わない 「作曲」という 服を 脱ぎ捨てた。

그러나, 나는 자신에게 맞지않는 ‘작곡’ 이라는 옷을 벗어던졌다.

読み手が「自身に合わない服を見極めることも1つの能力ではないか」を文脈比喩として明確に意

しての自然さが増す。また、仮に(14)の最後を「顔のようなものです」などと指標比喩に変更すれば、この違和感は緩和されるだろう。

識できるのは、「私は自身に合わない「作曲」という服を脱ぎ捨てた」という一節によってである⁽¹³⁾。

両者は現実世界では接点を持たない別々の出来事であるが、この文脈比喩の意図するところは、日本語母語話者・韓国語母語話者ともに、問題なく理解できるだろう。すなわち文脈比喩においては、「言語間ハードル」が問題とならない。このことに関連して東(2014)は、次のように述べている。

- (16) 短い語・句による項目に比べ、数語、文レベルの方が、そして、共通概念や英語概念基盤の項目の方が正答率が高い(中略)。周辺情報を提示した方が理解の難度を低め、ミスコミュニケーション緩和になるということである。(同179)

文脈比喩では、語・句のレベルを超えて、文・文章レベルで比喩的に表現することとなる。語・句のレベルよりも文・文章レベルの方が豊富な情報を表現できるから、執筆者と読み手の「共通概念・周辺情報⁽¹⁴⁾」も、必然的に豊富になっていくだろう。このような理由によって、文脈比喩では「言語間ハードル」が問題とならない。

(15) において「自身に合わない服を見極めることも1つの能力ではないか」と書くとき、執筆者は、その意図が他言語の母語話者にも理解されると確信しているだろうし、また実際、読み手が解釈できないことは極めてあり得ないだろう。

語・句のレベルでは「言語間ハードル」は否めないものの、その語・句を積み重ねていくことで、各々の語・句の相違は目立たなくなっていく。このことを比喩的に表現するならば⁽¹⁵⁾、無数のドットで描かれた絵を至近距離から見れば各々のドットの形を認識せざるを得ず、全景を認識し得ないが、一方、離れた距離をとって眺めれば、各々のドットの形は認識され得ず、全てのドットが織り成す全景を1つのまとまりとして認識し得る、という現象と同様であるだろう。

そして、言語こそ違っても同じ人間であるからこそ、文脈比喩(全景)から得られる意味や印象については、言語のレベルを超えた共通性が存在し、喩えられる元々のエピソードとの結合は、母語を問わず、広く読み手にとって理解可能なのだと考えられる。

5.2 中国語母語話者による文脈比喩

ある象徴的な一節によって、現実世界における教訓を表すものに、ことわざや故事がある。これも文脈比喩の1つと言ってよい。以下では、中国の故事を紹介している。

- (17) 私が最も紹介したいと思った中国のことわざは「只要功夫深，铁杵磨成针」です。日本語に訳すと「鉄のぼうが研磨されてはりになる」です。(c04)

⁽¹³⁾ 平(2015)では、比喩表現として理解される文をターゲット文、ターゲット文を比喩的な意味で理解させるよう誘導する文を誘導文章と定義した上で、比喩として理解したか字義的に理解したかの判断根拠について実験調査を行っている。その結果、「ターゲット文に対して比喩的な解釈を行う際には、字義通りの解釈を行うときよりも、文脈内の情報を判断根拠とすることがわかった(同223)」として、文脈比喩として解釈されるには、その判断根拠としての誘導文章の存在が重要であることを述べている。(15)において、ターゲット文は「自身に合わない服を見極めることも1つの能力ではないか」であり、誘導文章は「私は自身に合わない「作曲」という服を脱ぎ捨てた」である。

⁽¹⁴⁾ この場合の「共通概念・周辺情報」とは、当該の言語や文化の全般における広範かつ恒久的なものではなく、あくまで当該の文章内でのみ通用する限定的かつ臨時的なものである。

⁽¹⁵⁾ 以下の比喩では「語・句」を「ドット」で、「文脈比喩」を「全景」で喩えている。

- (17)' ~さえすれば 工夫 深い 鉄棒 磨く なる 針
「只要 功夫 深 铁杵 磨 成 针」。

この後の展開で、執筆者は「親」に「鉄のぼうが研磨されてはりになる」という一文の解釈について尋ねる。

- (18) 私は親にこの本を見せたのを今でもはっきり覚えています。親からもらった答えは「他人より努力すれば、できないことなどはない。」です。(c04)

- (18)' さえ より 他人 さらに 努力する ~ば ない する ない (完了) (連体) こと
「只要 比 别人 更 努力 就 没有 做 不 到 的 事」

「鉄のぼうが研磨されてはりになる」という一文が生成されることとなったエピソードを知らなければ、すなわち(多くの)中国語の非母語話者には、いきなり(18)の解釈を突き付けられても、受け入れがたいだろう。しかし実際の作文では、(17)と(18)の間に当該のエピソードが挿入されている。

- (19) 李白は「お婆さんは何をしているのですか?」と尋ねました。お婆さんは「この鉄杵を磨いて、刺繍針を作るのさ。」と答えながら顔を上げて李白ににっこりしてまたうつむいて鉄杵を磨き始めました。そして、李白は驚いて「服を縫う刺繍針ですか?」とお婆さんに聞きました。お婆さんは「もちろん」と李白に答えました。そして、お婆さんに「でも、こんなに太い鉄の杵をいつまでみがいたら細い刺繍針になるのですか?」と聞きました。お婆さんは逆に李白に「水滴は石に穴をあけることができ、愚公は山を動かすことができたなら、どうしてこの鉄の杵を磨いて刺繍針をつくることができないといえるかね?」と李白に聞きました。(c04)

- (19)' 李白 出る 前 行く 聞く 言う お婆さん あなた ~ている やる 何 お婆さん
李白 上 前去 问道 「婆婆 你 在 干 什么?」。婆婆
~と言う 私 で ここ ~ている を この 鉄棒 磨く なる 刺繍 針 使う
说道 「我 在 这 正在 把 这只 铁棒 磨 成 绣花 针 用」。
その後 李白 驚く (連用) 聞く 言う ~である 使う (達成) 縫う 衣服 (連体) 刺繍針 か
然后 李白 惊讶 地 问道 「是 用来 缝 衣服 的 绣花 针 吗?」。
お婆さん 答える 李白 言う 当然 その後 李白 ~に対して お婆さん 言う しかし こんなに
婆婆 回答 李白 说 「当然」。然后 李白 对 婆婆 说 「但是 这么
大きい (連体) 鉄棒 ~なければならぬ 磨く まで いつ 時 やつと できる 磨く なる
大 的 鉄棒 要 磨 到 什 么 时 候 才 能 磨 成
刺繍 針 (感嘆) お婆さん 反問する 言う 滴る 水 できる 穿つ 石 愚公 できる
绣花 针 啊!」。老婆婆 反问道 「滴水 可以 穿 石, 愚公 可以
移す 山 なぜ 君 できる 言う 鉄棒 ない できる ~される 磨く なる 刺繍 針 か
移 山, 为什么 你 会 说 铁棒 不 能 被 磨 成 绣花 针 呢?」。

このエピソードを読めば、言い換えれば(17) → (19) → (18)と、本来の提出順に読み進めていけば、読み手も得心できるだろう。換言すれば「他人より努力すれば、できないことなどはない」という現実世界における概念と「鉄のぼうが研磨されてはりになる」という象徴的な一節とが結びつく

わけである。

ここで重要なのは、(19) が文脈比喩になっている、ということである。そして唐突には (18) を理解できなくても、(19) を参照すれば、(17) の解釈として (18) を問題なく受け入れられる、ということである。このことは、文脈比喩が汎言語的な性質を持っている（≒言語間ハードルが存在しない）、ということを示唆するだろう。

6. まとめ

以上、指標比喩・結合比喩・文脈比喩という3分類に基づいて、学習者が執筆した日本語作文における比喩表現を検討してきた。以下、それぞれを振り返ってみたい。

まず指標比喩であるが、これは指標という言語形式によって比喩として理解することが要請される。したがって、

(11) 試験場で空気が凝るほど静かになりました。(再掲)

のように、日本語母語話者にとっては（当初は）奇妙な組み合わせであっても、その比喩としての解釈を成立させることができる。しかも馴染みにくかった分だけ、その比喩は新鮮に感じられることだろう。

次に結合比喩であるが、これには指標が存在しない。したがって、他言語の母語話者にとって奇妙だと感じられる結合は、「それを比喩として理解せよ」という要請がないので、奇妙なままである。

(14) 必ず正しく、流暢で、さらに上品の発音が要求されています。発音は言語を習得する人にとって、とても大事であり、顔でもあります。(再掲)

このような文脈において「発音」を「顔」で喩えることは、日本語母語話者にとっては違和感がある。これは (6b-1) の「言語表現は同じである（あるいは類似する）が概念基盤は異なる」ケースと言える。

最後に文脈比喩であるが、これは指標によってではなく、当該の文章における共有概念・周辺情報の充実化によって、比喩としての解釈を成立させると言える。

(17) 「鉄のぼうが研磨されてはりになる」(再掲)

このような一見すると何を意味するのか分からない一節であっても、それを説明する文脈比喩を参照すれば、それが意味するところを理解できるようになる。

以上の観察から、学習者が作文において比喩を書くときは、指標によって比喩としての解釈を要請する指標比喩、および共通概念・周辺情報の充実化によって比喩としての解釈を容易にする文脈比喩よりも、比喩としての解釈を要請する要因も、また比喩としての解釈を容易にする要因も持たない結合比喩に、そしてそのうちの (6b-1) タイプに、特に留意すべきである、と結論される。

参考文献

- (1) 東眞須美 (2014) 『比喩の理解』 ひつじ書房
- (2) 新城直樹 (2001) 「換喩と隠喩の区別について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』 46, pp.83-89
- (3) 新城直樹・金井勇人 (2009) 「諸分野における Metonymy (換喩) と Metaphor (隠喩) の概念」『埼玉大学国際交流センター紀要』 3, pp.25-34
- (4) 坂本勉 (1982) 「慣用句と比喩：慣用化の度合の観点から」『言語学研究』 1, pp.1-21, 京都大学言語学研究会
- (5) 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』 講談社
- (6) 平知宏 (2015) 「比喩理解における文脈情報利用の過程に関する予備的検討」『日本認知科学会 第32回 大会発表論文集』 pp.222-224
- (7) 多門靖容 (2018) 「第IV章 39 提喩」中村明他編『日本語文章・文体・表現事典』 p.206, 朝倉書店
- (8) 中村明 (1977) 『比喩表現の理論と分類』 国立国語研究所報告 57
- (9) 中村明 (1991) 『日本語レトリックの体系』 岩波書店

資料

- (1) 中韓母語話者による逐語訳つき日本語作文コーパス
URL: saitamagengoken.sakura.ne.jp/chikugo-corpus/
- (2) 島尾敏雄 (1960) 『死の棘』 講談社

本稿は、科学研究費補助金（2018年度～2020年度，基盤研究（C）、「逐語訳つき日本語作文コーパスによる意図と産出の対応を意識した日中韓の対照分析」，研究課題番号：18K00678，研究代表者：金井勇人）による研究成果の一部である。

（新城—琉球大学，蔡—秀林外語専門学校，金井—埼玉大学）

Analysis of Metaphorical Expressions in Japanese Compositions Written by Native Chinese and Korean Speakers: From the Viewpoint of "index simile," "joined metaphor," and "contextual metaphor"

In this study, we examined the properties of metaphorical expressions in Japanese compositions written by native Chinese and Korean speakers, considering the important factors that should be taken into consideration in Japanese language education. Specifically, we analyzed metaphorical expressions based on the three categories of "index simile," "joined metaphor," and "contextual metaphor" through compositions extracted from the Japanese Composition Corpus with Verbatim Translation by Native Chinese and Korean Speakers. In general, a metaphor is considered to be rooted in its mother tongue and hence may not be understood by the native speakers of other languages. We termed such hurdle as "interlingual hurdle" to reveal that the categories of "index simile" and "contextual metaphor" inherently exhibit the property of overcoming "interlingual hurdle," in contrast to "joined metaphor." It was observed that in the case of "joined metaphor," errors are especially likely to occur in the presence of the same linguistic expression but different conceptual basis. Therefore, this study concludes that "joined metaphor" is of primary importance in Japanese compositions.

【Keyword】 index simile, joined metaphor, contextual metaphor, Japanese composition,
contrastive study in Japanese & Chinese & Korean, interlingual hurdle

(ARASHIRO: University of the Ryukyus, CAI: Shurin College of Foreign Languages, KANAI: Saitama University)